



町長室の壁に次の詩が掲げてある。

待っていた長男に  
嫁さんが来た  
カラフルな洗濯物が  
風に揺れている  
いいもんだ

書道界の重鎮である菅又蘆舟先生から賜った書である。先生の魂がそのまま文字となつたような温かく、懐深く、それでいてリズミカルな書である。夢・未来・希望・幸福のありよう、市井の人間が生きることのありとあらゆる歓びが僅か5行の中に込められている気がしてならない。町政の要諦もまたしかりであると思う。

毎日の生活の中で一つでも二つでもどんな小さなことで、 「いいもんだ」と感じられる事。そしてたぶん、その「いいもんだ」は立派な道路でも文化会館でもなく、人間の暮らしをも含めた命の輪廻のなかにしか見いだせないものだと思う。

人間が豊かさを求めるこ<sup>は至極当然だが、その豊かさが物・金だけに偏れば、他者のことは関係なく、緑も水も青空もみんな金に換えようと</sup>

そして今その誤りにやつと氣がついた。メダカやホタルをもう一度なんとか自然に還したいと汗を流す人たちがいる。生ゴミを燃やすずに土に還そうという動きは徐々に浸透してきている。映画「オサムの朝」や妹尾河童著「少年H」が多く支持を集めていることもその表れのような気がしてならない。

町長に就任して1年余、わたしは毎日「いいもんだ」を感じている。

基金」に寄付をされている方。人々が動きだす前の大暮薄暗い早朝に地域のごみステーションを整え、街路樹の根元の草をとり、晚秋の落葉を掃き清めている人。誰に命令されるわけでもなく、なんの気負いも街いもない清心な魂を持つ多くの町民。

そんな人たちと共に高根沢の将来に夢を描く。夢を語ることは楽しいが、夢を実現することはもっと楽しい。

夢を喰らう猿の如く、わたしは幸せである。



町長記



外国人のための日本語講座